

頑張れ！ オータニー

首藤 静夫

大リーグ大谷選手の活躍が素晴らしい。ピッチャーとして、バッターとして、走者として、そして試合中に見せる相手選手への気づかい、試合の前後に見せるファンサービス、エチケット等々。大リーグを代表する選手になりつつある。

七月半ばのオールスター戦とその前日のホームラン競争は現地で盛り上がっていた。今年は大谷選手に焦点を当てた演出で、優れた選手には国籍を問わず称賛が集まる米国らしさを感じた。日本でもテレビ局が特番を組み、彼の地元などは揃いの赤ユニフォームでテレビ応援するなど大いに盛り上がった。

近々東京オリンピックが開幕するが、残念ながらそちらの話は盛り上がらない。出場選手の近況も最終聖火ランナーの予想も聞かない。オリンピックの話といえばコロナ関係ばかりだ。こういう雰囲気の中で、海の向こうの大谷の活躍ばかりが日本でも目をひいている。

大谷人気はひと言で言えばスポーツマンとしての爽やかさだと思う。近年スポーツのプロ化が進み、オリンピックを目指すアマチュア選手にもコーチや専属トレーナーがつき、競争馬並みの徹底管理である。ちょっと調子を落とせば大事をとって欠場させ、或いは途中棄権させる。

そういう時代に、大事なピッチャーが盗塁をし、ホームスチールまでする。打った翌日に登板する。誰が想像しただろう。まるで高校野球のようだ。スポーツが本来有しているはずの伸びやかさ、爽やかさを野球ファンは大谷に感じているに違いない。それが最も求められるのはオリンピックのはずなのだが――。

日本のプロ野球は長嶋から変わったといわれる。それまでの地味な「職業人野球」を一新した。走・攻・守いずれのプレーも爽やかで、野球を知らないミスターもファンに取り込み、プロ野球発展の礎となった。

大谷を見ていると、単なる上手を通り越し、長嶋に似たものを感じる。一つも二つも突き抜けている。願わくば、過労やケガを避けてシーズンを全うして貰いたい。